

エンデュランス馬術競技

札幌市医師会
下田ひふ科耳鼻咽喉科クリニック

下田 和夫

馬術競技には何種類もありますが、有名なのは法華津寛さんがロンドンオリンピックに最年長で出場した馬場馬術競技でしょうか。そのほかに障害を飛び越える障害飛越競技もあります。私たち夫婦が行っているのはエンデュランス馬術競技です。この競技はアメリカでは50年前から、ヨーロッパでは20年ほど前から正式に始まったとされ、馬術競技としては一番新しく誕生したといわれています。日本でも20年ぐらい前から、初めは北海道で始まりました。競技は数十kmの長距離を数時間かけて騎乗し、その走破タイムを競う競技です。馬の健康管理のため数十kmごとに獣医師のチェックを受け、競技を続行できるか判断を受けます。馬に乗っているだけでなく、馬の健康状態を常に配慮する必要があります。

私たち夫婦も10年少し前から始めました。最初、小樽の春香山で初心者乗馬を経験し、その後道内にある施設を巡り、いろいろなところで乗馬を楽しみました。一番遠いところでは網走まで行きました。そのうち道東の鹿追町の牧場で勧められてエンデュランス競技に参加するようになりました。馬は比較的臆病な動物で、パニックになってごくまれに暴走することもある。落馬して骨折や裂傷を受けたこともあります。それでも馬に乗ることは楽しいので続けられます。

道内ではいろいろな場所で競技会が開催されます。歌志内市、鶴居村、浜中町など、普段はまず訪れないだろうと思われるところへ行きました。観光地ではない北海道も楽しめます。

現在は夫婦で2頭の馬を所有し、道東の浜中町の牧場で預かってもらっています。馬の種類は長距離走に向いているといわれているアラブ種です。平均して月に2回くらい週末に乗りに行っています。ただし、浜中町までは400kmあります。高速道路が延伸したので少し楽になりました。平日の診療と週末の乗馬というメリハリのある生活を楽しんでいます。乗馬を模した健康器具もあるくらいで、体幹のトレーニングには良いようです。

トコロ郡サロマベツ

帯広市医師会
北斗病院

人見 知洋

トコロ郡サロマベツ。齢50を過ぎた私が幼少期に繰返し聞いた北海道の地名。

岡山で生まれ育った私は筋金入りの「おばあちゃん子」。寝床にもぐりこんで昔話を聞くのが大好きだった。聞いている私と同じ年頃のおばあちゃんが数年間暮らしたトコロ郡サロマベツ。昔話だが経験談、私の曾祖父が娘婿と二人で開いた医院があったトコロ。明治39年生まれのおばあちゃんが話す北海道は、1年の半分はソリしか交通手段がないという。馭者が鳴らすクマよけの笛の音。それでも街は活気に溢れ、診療の謝礼に海の幸・山の幸が豪快に積み上げられ、アイヌの人々が受診すると物陰からのぞき見していた子どもたちがその姿に圧倒されるトコロだった。

地図が大好きな小学生になった私は、サロマ湖や知床半島を眺めては、その辺りの生活を昔話そのままに想像していた。高校生になると担任が過ごした恵迪寮の話に刺激を受け、幼少期からの憧れのまま北大文学部を目指すも、おばあちゃんの積年の願いを叶えるため、当時文系から受験できた九州の医学部へ進路変更した。九州弁を操るようになり、肥後猛婦を娶った私は、北への思いが薄れていくのに気付くこともなく、98歳になったおばあちゃんを両親と共に佐賀に呼び寄せ、そして105歳の時に、最後の願い、私に最後の脈をとってもらうことを叶えた。

晩年、老化が進んだおばあちゃんは、空襲で焼け出される際も持ち出した大事なアルバムの写真を切り刻んでしまい、佐呂間診療所の前で撮った一族の姿も、子孫の淡い記憶として残されるのみとなった。しかし、おばあちゃんの死をきっかけに北への思いが何故か沸騰した私は、猛反対の家族を説得し、帯広移住を決断してしまった。

そういえば、私の父も駆け出しの日本史教師だった一時期、タキカワ高校でお世話になったという。私まで4代が北海道への移住経験を持つということは、遺伝的に組み込まれた方位磁石のようなものがあるのだろうか。転校に泣いて抵抗した移住5代目の息子2人に対し、結局は北を目指したのだろう、所帯を持ってからでは大変だ、と移住を正当化するには都合の良い話だが、寒さの苦手な肥後猛婦には何を言ってもただの言い訳である。

移住から4年近くになった現在だが、思いを成就した私は、当地の自然環境、食材、職場など決断は全くの正解であったと感じている。息子2人も帯広が大好きになった。妻もそうだ、と信じている。